

## 「第3回ふるさと秋田文学賞」受賞作品

### ○小説の部

#### ふるさと秋田文学賞 「たちきる」

いわいけいご  
岩井圭吾さん（神奈川県藤沢市）

あらすじ

剣道の実業団選手である「おれ」は三時間立ち切り試合で基立ちを務めるため、埼玉から故郷の湯沢へと戻ってくる。「おれ」は亡くなった母に、基立ちとしての姿を見せられなかったことを悔やんでいた。一方、剣道七段の父は定年退職を迎え、放心したように過ごす日々を送っていた。「おれ」は川連漆器の胴を締め、真冬の体育館で立ち切り試合に挑む。過酷な試合の最後に「おれ」は父と対峙し、ついに亡き母への未練を断ち切る。

#### ふるさと秋田文学賞 佳作 「直武、りんどうの恋」

もりかわるみこ  
森川瑠美子さん（神奈川県横浜市）

あらすじ

離縁され両親のもとで鬱々とした日々を送っていたゆいは、平賀源内と知り合いの父親の頼みで、江戸詰となった秋田藩士で絵師でもある小田野直武が、解体新書の挿絵を描く間、身の回りの世話をすることになる。

画業に励む直武に惹かれていくゆいは真心を込めて世話をし、直武への思いを抑えきれなくなる。そして、直武に抱かれたあと、「不忍池図」の下絵を見せられ、芍薬の鉢の陰に描かれたりんどうの花が、自分を描いたものであることを知る。

### ○随筆・紀行文の部

#### ふるさと秋田文学賞 「山男と夫の贈物」

いしはらとしこ  
石原敏子さん（南秋田郡大湍村）

あらすじ

宮澤賢治の童話「祭りの晩」の山男は、助けてくれた少年にお礼として心のこもった贈物を届けた。貰った人の心を暖かくし相手のことを思って切なくなるような気持にさせる贈物の原点は、これではないだろうか。

春の夜、夫が歩いて持ち帰り渡されたラジオは、童話の山男の姿と重なって見えた。

長い年月が経っても、人はやさしくされた記憶は心の底に残っており、忘れることはない。生きる力を与えてくれている。

#### ふるさと秋田文学賞 佳作 「こまちの旅」

えんどうみやこ  
遠藤美弥子さん（秋田市）

あらすじ

2010年から2015年にかけて、父の介護、その後、母の一人暮らしから有料ホーム暮らしのサポートのため、私は、月に最低2回、多いときには7回秋田と東京を往復しました。こまちの車窓には、その時々私の心の持ちようによって、いろんな風景が見えました。一人暮らしがだんだん難しくなり、変わっていく母。それを許せない私。そんなことを秋田の風景とともに、日記のように書いてみました。